

## 外来がん薬物治療患者における保険薬局クリニカルパスの開発と有用性検証

谷本愛 1)、下川友香理 1)、力武志保 1)、本田雅志 1)、土屋りえ 1)  
平島八恵子 2)、槇林智子 3)、阿曾沼伸一 3)、森みなみ 3)

総合メディカル株式会社 そうごう薬局天神中央店 1)  
総合メディカル株式会社 人財育成部 2)  
福岡県済生会福岡総合病院 3)

【背景】 外来がん薬物治療を適正に実施するために、経口抗がん剤の処方鑑査、副作用対策を十分に行い、患者のアドヒアランスを向上させるファーマシューティカルケア(以下PC)が必要である。そうごう薬局天神中央店(以下当薬局)では外来がん薬物治療患者のPCを標準化し、かつ質を向上させるために2015年9月から『外来がん薬物治療患者における保険薬局クリニカルパス(以下パス)』の開発に着手し、患者病態や治療目的を把握する「がん患者初回確認シート」、患者の状態を継続的に把握する「事前状況確認シート」、アドヒアランス不良や副作用発現などを評価する「スクリーニングシート」を作成し、2016年3月から運用している。今回、パス使用前後の介入事例を比較することでその有用性を検証した。

【方法】 外来がん薬物治療中に当薬局で抗がん剤に関するPCを受けた患者のパス使用前(2014年10月～2015年9月:対象患者790名)と使用后(2016年10月～2017年9月:対象患者743名)の疑義照会を調査した。疑義照会内容を①抗がん剤の適正使用に関する確認②スケジュールに合わせた日数調整③飲み忘れによる残薬調整④抗がん剤の処方漏れ⑤患者のアドヒアランス不良への支援⑥副作用発見による支持療法薬の提案⑦その他に分類し、件数と採択率(薬剤師が積極的な処方提案をした疑義照会のうち主治医に採択された件数の割合)を比較検討した。

【結果】 疑義照会件数はパス使用前の61件に対し、使用後は142件であった。介入内容は特に①抗がん剤の適正使用に関する確認は4.2倍、④抗がん剤の処方漏れは3.1倍に増加した。また採択率は87%→92%であった。

【考察】 パスを使用することで疑義照会の件数が増加し、特に抗がん剤の適正使用に関する確認、抗がん剤の処方漏れの発見が増加した。これは薬局での外来がん薬物治療患者へのPCにおいて必要な確認事項をあらかじめエビデンスに基づき標準化しておくことで、薬局での限られた時間の中で適切な介入が行えるようになったためと考えられる。このことからパスの開発、ならびに運用は薬局でもPCの質の向上に有用であるといえる。

今後パスを継続的に運用し、またその改良を重ねることで、薬局での外来がん薬物治療患者へのPCをさらに向上させていくとともに地域連携パスとして発展させていきたい。